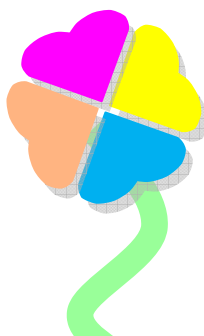




神奈川県

学校ができる 教員ができる

不登校の未然防止



神奈川県立総合教育センター

はじめに

平成21年度より3年間にわたり、神奈川県立総合教育センターは「不登校対策に係る調査研究」に取り組んできました。平成22年度には全所体制でこの調査研究に取り組む「不登校対策プロジェクトチーム」を立ち上げ、「研究」、「研修」、「教育相談」の三つの機能を生かし、総合教育センターの総力をあげて取り組んできました。

私どもの調査研究の中心は不登校の未然防止です。未然防止の重要性は、これまでも言われてきたことですが、未然防止の取組みを更に徹底しなければ、神奈川の不登校の状況が大きく改善されることは難しいと考えています。また、不登校の未然防止を進めるに当たって、その根幹となるのは、「魅力ある授業づくり」と「居心地のよい学級づくり」であると考えています。このことは学校の教育活動そのものであり、学校全体で取組み、実践すべきことでもあります。

「不登校対策プロジェクトチーム」は、組織的な不登校対策に取り組む、成果を上げた県内20校近くの学校をリサーチし、実践事例の収集を行ってきました。このリサーチの結果、不登校児童・生徒が減少し、成果を上げている学校の共通点は、「魅力ある授業づくり」と「居心地のよい学級づくり」を中核に、さまざまな取組みを総合的に結び付けた校内体制づくりと、管理職のリーダーシップがあることです。

さらに強調しておきたいのは、そうした学校では、教員一人ひとりが多忙の中でも欠席に敏感になることや、児童・生徒に寄り添う姿勢を大事にするなど、不登校の未然防止に対する意識を持ち、協働して丁寧な取組みを進めていることです。

本ガイドブックで紹介している実践事例・相談事例は、「不登校対策」に限らず、いじめ・暴力行為等、問題行動の未然防止を含め、あらゆる教育活動に通底する基盤であると考えます。

本ガイドブックが、各学校においての実践や校内研修等で、積極的に活用され、不登校で悩む児童・生徒や保護者への支援に少しでも役立つことを期待します。そして、すべての児童・生徒が、生き生きと学校生活を送ることができるよう願っています。

結びになりますが、本調査研究の推進に当たり、ご指導・ご助言いただいた3人のスーパーバイザーを始め、聞き取りにご協力いただいた各教育事務所・市町教育委員会並びに各調査訪問校の皆様に深く感謝申し上げますとともに、心より御礼申し上げます。

平成24年3月

神奈川県立総合教育センター
所長 下山田伸一郎

はじめに

目 次

序章

..... 1

1章

不登校対策序論 5

神奈川県の不登校の現状と課題は？

- 1 神奈川県の不登校の現状と課題
 - (1) 不登校児童・生徒数と不登校の捉え方
 - (2) 不登校になった原因・きっかけ
 - (3) 中1で急増する不登校

未然防止に大切なことは？

- 2 新たな不登校を生まないために

神奈川県の取組みと対策の視点は？

- 3 神奈川県教育委員会の取組み
 - (1) 不登校対策検討委員会のこれまでの取組み
 - (2) 不登校対策検討委員会最終報告

2章

わかる喜びのある授業 15

授業への願いや思いを知ろう

- 1 児童・生徒が望んでいること
- 2 いま求められている授業とは
- 3 未然防止につながる授業のポイント
 - (1) 一人ひとりのよさや違いを生かした授業
 - (2) 活躍できる場面がある授業
 - (3) 「ユニバーサルデザイン」を取り入れた授業
 - (4) 基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る授業

どういう授業をすればいいの？

- 4 具体的な取組み
 - (1) 「聴いて 考えて つなぐ学習」で不登校が解消！
 - (2) 授業研究による学校改革で不登校生徒が減少！
 - (3) 支援教育を基盤にした授業づくりで不登校生徒が減少！
 - (4) 「学び直し」を軸としたカリキュラムで不登校対策！

具体的な取組みを知りたい！

振り返りをして、次につなげよう

- 5 自分の授業を見直してみよう

3章

居心地のよい学級づくり 41

自分の学級は居心地のよい学級なのか？

居心地のよい学級づくりの方法は？

具体的な取組みを知りたい！

- 1 自分の学級を見直してみよう
- 2 児童・生徒の日常の様子 of 把握
- 3 学級集団づくりのキーワード
- 4 学級集団づくりの具体的な取組み
 - (1) チームで育てる人間関係づくり
 - (2) 班編成を活用した人間関係づくり
 - (3) レクリエーションやゲームで人間関係づくり

資料1～3

4章

小中連携・中高連携の推進 55

上級学校へのスムーズな移行方法は？

学校種間連携の具体的な取組みは？

- 1 学校種間連携の現状と課題
- 2 具体的な取組み
～中1ギャップ解消を中心に～
 - (1) 校種の違いによる壁を取り除くために
 - (2) 学習指導方法や学習形態をつなぐ
 - (3) 小中連携シートの活用～行政・専門家との連携～
 - (4) 中高連携のあり方～支援シートの活用～

5章

校内体制づくり 69

校内体制で大切なことは？

未然防止につながる校内体制は？

未然防止に必要な教員の意識は？

- 1 校内体制のあり方
- 2 具体的な取組み
 - (1) チーム支援を中心とした校内体制
 - (2) 教育相談コーディネーターを生かした校内体制
 - (3) 「減らす・生まない・増やさない」をキーワードにした校内体制
 - (4) 教育課程の工夫を中心とした校内体制
- 3 教育相談事例からみる校内体制

終章

..... 85

【資料編】 89

- 1 不登校の特徴
- 2 総合教育センターの取組み

【不登校対策に関する神奈川県教育委員会刊行物等一覧】 99

【引用文献・参考文献】 100



本ガイドブックを手にした先生方へ

今日、児童・生徒の不登校対策は、全国的かつ喫緊の教育課題です。文部科学省が平成23年8月に発表した平成22年度の全国の不登校児童・生徒数は、およそ17万人でした。そのうち、神奈川県の公立小・中・高等学校の不登校児童・生徒数は、およそ1万3千人で、前年より若干減少しているものの、全国的にも高い数字であるのは事実です。神奈川県では、不登校対策が教育の最重要課題であると言ってもよいでしょう。

神奈川県教育委員会は、平成19年に「神奈川県不登校対策委員会」を設置し、児童・生徒の不登校の未然防止や登校支援に取り組んできました。こうした取組みに加えて、神奈川県立総合教育センター（以下、「総合教育センター」という。）では、平成21年度から3年間にわたる調査研究を行い、不登校対策について事例収集や考察を進めてきました。

不登校の原因やきっかけには、様々な要因が考えられますが、総合教育センターでは、学校に原因やきっかけがある不登校を中心に考え、新たな不登校を生まないこと、つまり未然防止を中心に据えて、調査研究を進めてきました。

研究に取り組む中で、総合教育センターで実施した「不登校対策の取組みに係る研修講座」の受講者から、次のような声が聞かれました。

- 今まで未然防止という考えを持ったことがなく、不登校の生徒をどうやって学校に来るようにするかということばかり考えていました。
- 不登校になってからではなく、ならないようにする未然防止が大切であることがわかりました。
- 不登校の原因は、本人や家庭にあるとして、学校の授業や学級経営が関係しているとは感じていなかったもので、今までの認識を変えなければならぬと感じました。

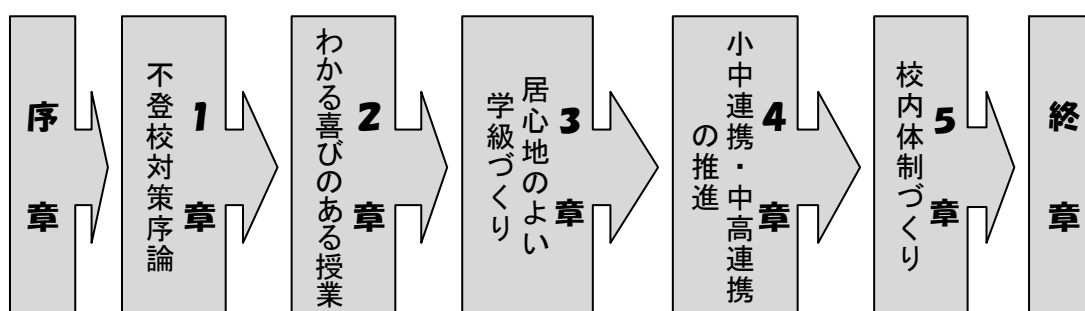
先生方の不登校児童・生徒へ対応する意識は高いものの、授業づくりや学級経営の中で不登校を未然に防止するという考え方や実践が十分であるとは言えないことがわかります。

神奈川県の不登校対策を一層推進させるためには、教師一人ひとりが不登校の未然防止について理解し、学校や児童・生徒の実態を踏まえて、すべての児童・生徒が、生き生きと学校生活を送ることができる魅力ある学校をつくっていくことが必要なのです。


このガイドブックが各学校を始め、各教育関係機関等で活用され、不登校の未然防止の一助になることを願っております。

本ガイドブックの構成と特徴

このガイドブックは、総合教育センターが2年間にわたり調査訪問した学校における、不登校の未然防止につながる取組みを始め、小・中学校で不登校を経験した生徒とその保護者の声、そして「不登校対策の取組みに係る研修講座」の受講者の声などを、次のように構成してあります。



1章から5章は、各学校における日常の教育活動や校内研修会、教育委員会の研修会等で活用しやすいように、次のような工夫をしました。

- ① 一つの項目を 1 ページまたは見開き2ページにまとめました。
- ② 各項目の内容で、「押さえて欲しいこと」「理解して欲しいこと」を、 **ここがポイント** の欄に簡潔に記述しました。
- ③ 自分の取組みを振り返ったり書き込んだりすることができるシートを掲載しました。
- ④ ガイドブック作成に当たってご助言いただいたスーパーバイザーからのご意見やメッセージを、コラムにして掲載しました。

このガイドブックは、表題にあるとおり「不登校の未然防止」を目指したものです。不登校対策に当たっての課題は、多岐にわたります。このガイドブックで課題の全てが解決できるとは言えませんが、ここに紹介されている具体的な取組みは、新たな不登校を生まないための手掛かりとなるでしょう。

神奈川県教育の最重要課題とも言える不登校問題の解決に向けて、教師一人ひとりが不登校の未然防止への意識を高め、児童・生徒のために魅力ある学校づくりに取り組んでいきましょう。

1 章

不登校対策序論

不登校の未然防止を考えるには、まず、不登校の現状を把握し、どのような課題があるのかを知ることが必要です。

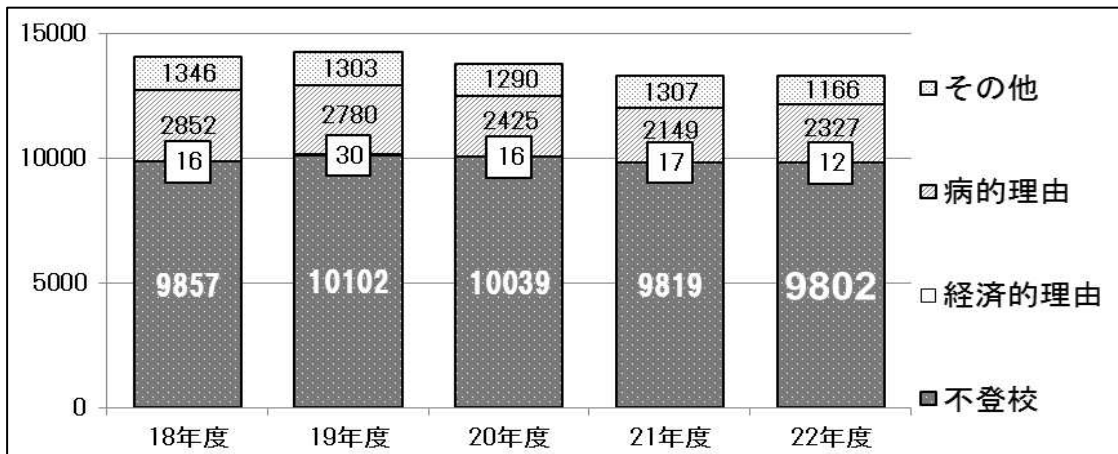
この章では、神奈川県内の不登校児童・生徒数や不登校になった原因にはどのようなことがあるのかを知り、不登校の未然防止で大切なことは何か、具体的にどのような視点が必要なのかを考えます。

1 神奈川県の不登校の現状と課題

(1) 不登校児童・生徒数と不登校の捉え方

平成22年度、神奈川県内の公立小・中学校における不登校〔注1〕の児童・生徒数は、小学校2,246人、中学校7,556人、合計で9,802人でした。

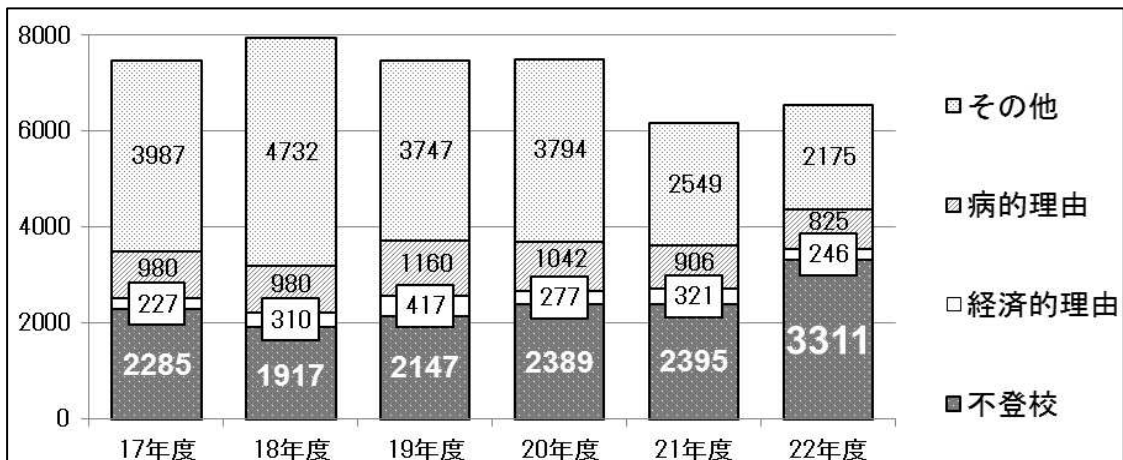
下のグラフのように、平成19年度には1万人を超え、その後はやや減少しているものの、人数・出現率ともに依然として全国最多の状況が続いています。



第1図 公立小・中学校 理由別長期欠席（30日以上）児童・生徒数の推移

次に、公立高等学校の状況を見てみましょう。

文部科学省は、平成16年から高等学校における不登校生徒数を算出しています。下のグラフを見ると、平成22年度は、長期欠席者〔注2〕が前年度よりやや増加しています。そのうち「その他」「病的理由」「経済的理由」は減少しているものの、「不登校」の生徒が3,311人となり、前年度より900人以上増えています。



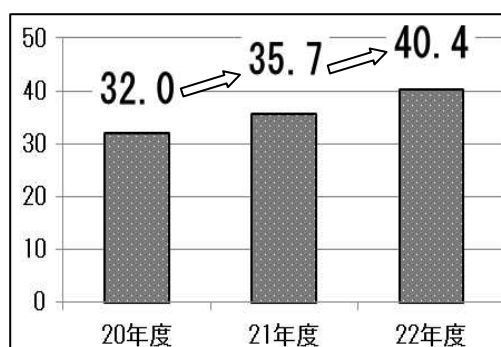
第2図 公立高等学校における長期欠席者の推移〔全日制・定時制合計〕

〔注1〕長期欠席者の中で、何らかの心理的・情緒的・身体的あるいは社会的要因・背景により登校しない、あるいはしたくてもできない状況にある者。ただし、病気や経済的な理由によるものを除く。

〔注2〕年間30日以上学校を欠席している児童・生徒。

また、県内の公立小・中学校における「長期欠席者に占める不登校の割合」は73.7%であり、全国の平均（平成21年度は67.7%）より6ポイントも高くなっています。このことは、高等学校についても言えることですが、児童・生徒の欠席を、単純に「病気」等と決めてかからず、学校に欠席の要因があるのではないか、不適應を起こしているのではないかなどと、欠席の理由をむしろ「不登校」と捉えようとしていることを示しています。そして、「不登校」と捉えるからこそ、各学校がいち早く適切な支援を行うことができるようになるのです。

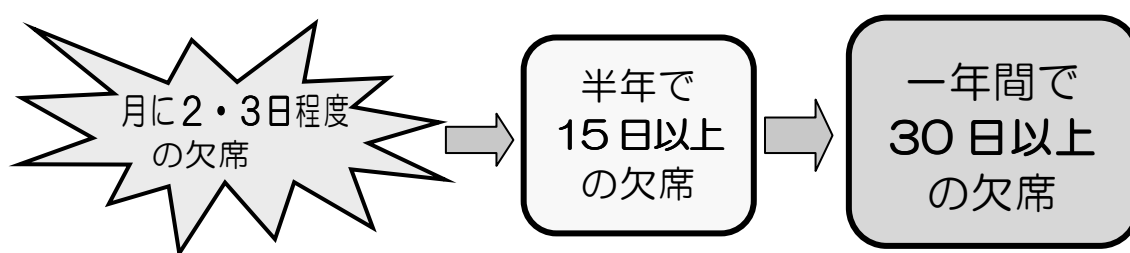
事実、右のグラフのように、平成22年度の改善率〔注3〕は、前年度より4.7ポイントも高い40.4%となりました。全国の不登校児童・生徒の改善率は、31.1%で神奈川県は9.3ポイントも上回っており、各学校の支援が効果をあげていることがわかります。



第3図 不登校児童・生徒の改善率【%】

「不登校」の一つの基準は、「年間30日以上の欠席」です。この「年間30日以上の欠席」は、言い換えれば「月に2・3日程度の欠席」ということになります。年度の始めはそれほど休んでいないように見えても、半年後・一年後には「不登校」の状態になっているというケースは珍しくありません。

児童・生徒の欠席に対しては、月2・3日の欠席を「不登校になる可能性がある」と捉え、早期に支援を行うことが不登校の未然防止につながるのです。



ここがポイント

- 月に2・3日の欠席から意識して対応を！
- 9月末時点で15日以上欠席している児童・生徒に具体的な支援を！

〔注3〕改善率とは、不登校児童・生徒のうち、「指導の結果、登校する又は登校できるようになった児童・生徒の割合」
 【第1図・第2図】平成22年度神奈川県児童・生徒の問題行動等調査結果一覧〔確定値〕のデータをグラフ化
 【第3図】平成22年度神奈川県児童・生徒の問題行動等調査結果概要〔確定値〕のデータをグラフ化

(2) 不登校になった原因・きっかけ

不登校の原因やきっかけは、第1表のように学校に係る状況・家庭に係る状況・本人に係る状況など様々です。

ここでは学校にポイントを当てて見てみましょう。

学校に係る状況に注目し、第2表を見るとどの校種でも「いじめを除く友人関係をめぐる問題」と「学業不振」が上位を占めていることがわかります。

このことを踏まえて、「学校が教員ができること」を考えると、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」をきっかけとする不登校を未然に防止するためには、良好な人間関係の下での居心地のよい学級づくりが求められ、「学業不振」をきっかけとする不登校を防止するためには、わかる授業や楽しく喜びを感じられる授業が求められていると言えます。

小学校の3位には「教職員との関係をめぐる問題」が入っていますが、不登校の原因やきっかけを考える際、まず教師自身に原因やきっかけがあるのではないかと考えてみることも必要だと言えます。そうした教師の意識や姿勢が、児童・生徒との信頼関係づくりにもつながっていくのです。

第1表 不登校になったと考えられる状況(%) 複数回答

区分	小学校	中学校	高等学校(全)	高等学校(定)
学校に係る状況	31.2	51.4	44.2	32.7
家庭に係る状況	47.6	24.6	19.9	14.0
本人に係る状況	81.3	89.5	74.1	71.6

第2表 不登校になった原因・きっかけのうち学校に係る状況

校種		原因・きっかけ
小学校	1位	いじめを除く友人関係をめぐる問題
	2位	学業不振
	3位	教職員との関係をめぐる問題
中学校	1位	いじめを除く友人関係をめぐる問題
	2位	学業不振
	3位	いじめ
高等学校	1位	学業不振
	2位	いじめを除く友人関係をめぐる問題
	3位	入学、転編入学、進級時の不適応



ここがポイント

○学校に原因やきっかけがある不登校を防止するために、「居心地のよい学級づくり」と「わかる喜びのある授業」が求められる

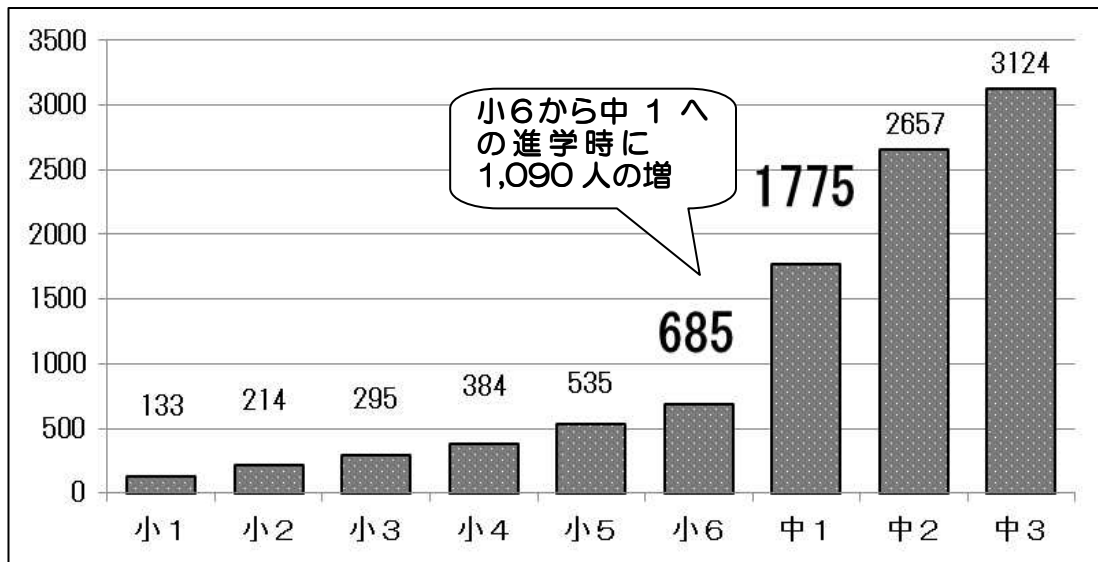


(3) 中1で急増する不登校

学年別不登校児童・生徒数を表す下のグラフを見ると、小学校6年生から中学校1年生への進学時に、不登校数はおよそ2.6倍の1,775人に急増していることがわかります。いわゆる「中1ギャップ」〔注4〕です。

中学校に入学して、学習形態や生活パターンが大きく変化したことがその原因だとすれば、小学校と中学校が連携して取り組まなくてはなりません。

さらに、小・中学校を通じ、進級すると新たな不登校が生まれていることも下のグラフからわかります。「中1ギャップ」だけでなく、各学年で新たに生まれている不登校も大きな問題です。既に不登校になっている児童・生徒を減らすということと同時に、新たな不登校を生まないという未然防止の考え方が求められています。



第4図 学年別不登校児童・生徒数



ここがポイント

- 「中1ギャップ」を解消するために、小学校・中学校、それぞれが取り組むことを確認し、連携して取り組む必要があることを知ろう
- どの学年も、新たな不登校を生まない意識を持とう

〔注4〕中1ギャップとは、小学生から中学1年生になったとたん、学習や生活の変化になじめずに不登校となったり、いじめが急増したりするという現象

【第4図】平成22年度神奈川県児童・生徒の問題行動等調査結果一覧〔確定値〕のデータをグラフ化

2 | 新たな不登校を生まないために

既に不登校状態にある児童・生徒に対する支援が大切なことは言うまでもありませんが、不登校を減らすために、“新たな不登校を生まない”という意識が重要です。

そのためには、教員一人ひとりが日常の教育活動を振り返り、不登校に対する意識を持って取り組むことが大切です。また、不登校の原因・きっかけからもわかるように、「わかる喜びのある授業」や良好な人間関係を土台とする「居心地のよい学級づくり」が重要です。この二点をより充実させるために、効果的な小中連携、中高連携などの「学校種間連携」の推進や「校内体制」を整えることが重要で、これら四つの視点が児童・生徒にとって魅力ある学校をつくり、新たな不登校を生まないことにつながっていきます。

平成22年に文部科学省から出された『生徒指導提要』〔注5〕には、次のような記載があります。

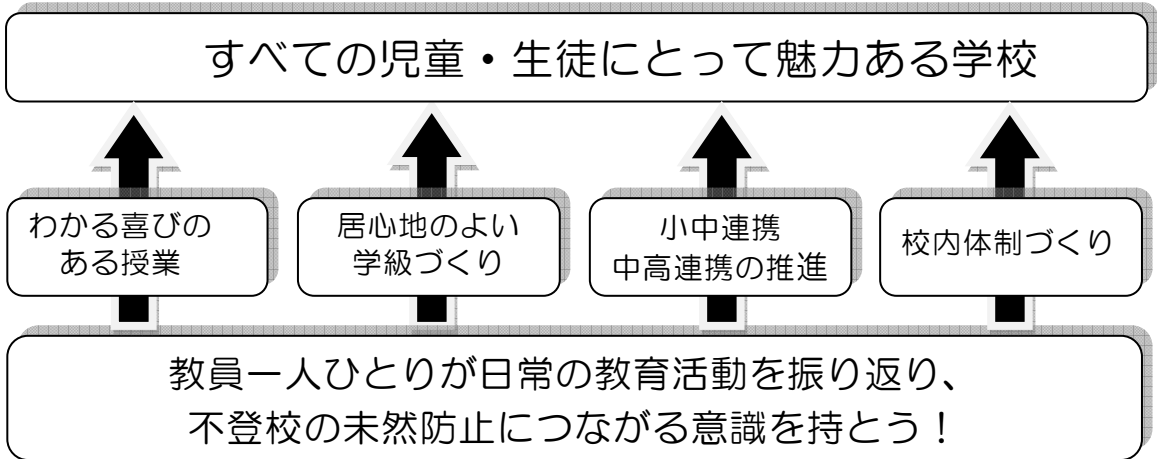
③すべての児童生徒にとって居場所となる学校を目指して

不登校児童生徒の学校復帰を目指すに当たっても、また不登校の予防・開発的な対応という視点からも、学校教育をより一層充実させるための取組を展開することが大切です。「不登校の児童生徒にとって居心地のいい学校」は「すべての児童生徒にとっても居心地のいい学校」になるという視点から、すべての児童生徒が楽しく通えるような学校教育が目指されるべきだと考えられます。とりわけ、入学・進学など、成長の節目においては学校や学年の移行が円滑に進むよう細やかな配慮が求められます。

(文部科学省a 2010『生徒指導提要』p.188「第6章 II 第12節 1 (1)不登校に対する基本的な考え方」)

この記載内容を読み解くと、上で述べた四つの視点は、「すべての児童生徒にとって居場所となる学校」、「魅力ある学校」を目指すために重要であることが裏付けられます。

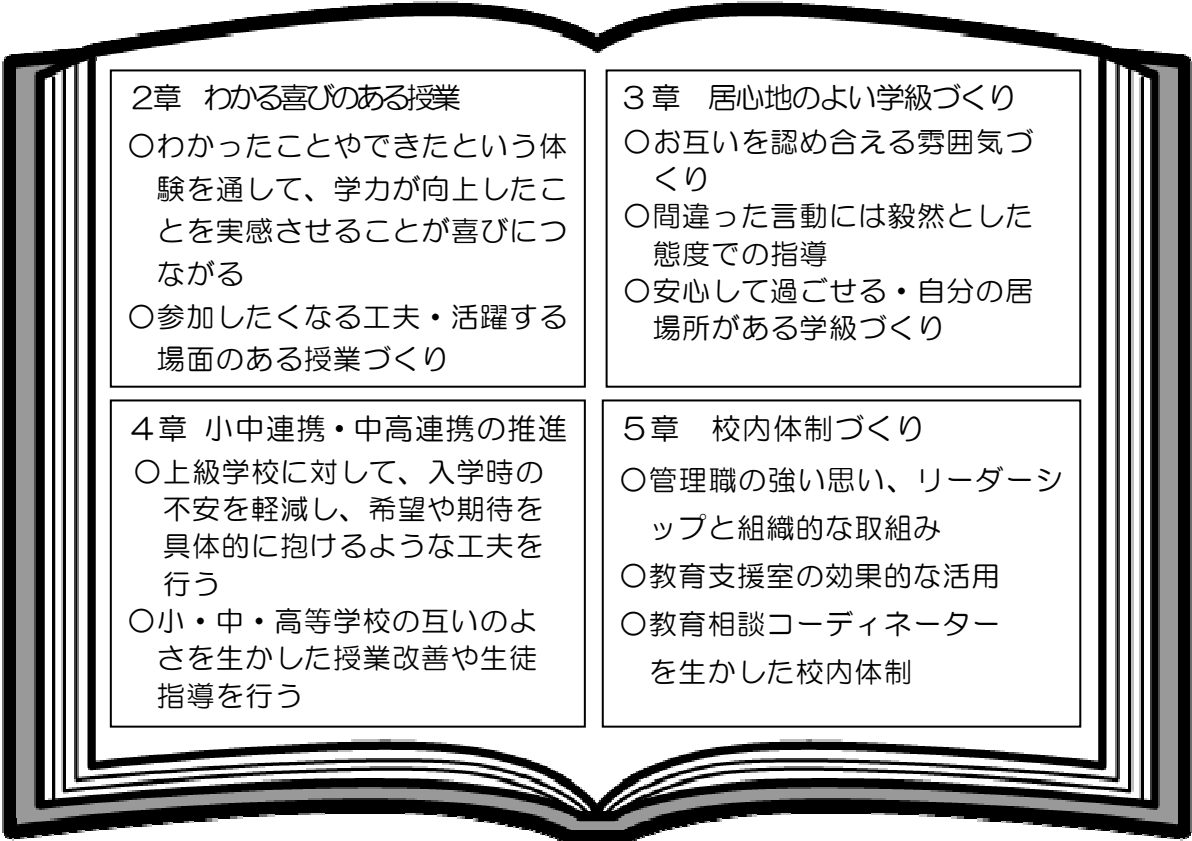
〔注5〕 小学校段階から高等学校段階までの生徒指導の理論・考え方や実際の指導法等について、網羅的にまとめた生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書。http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/04/1294538.htm



新たな不登校を生まないために

1章では、神奈川県の不登校の現状や課題を通して、不登校対策の視点について述べてきました。2章以降は、下のように未然防止につながる四つの視点で構成しました。

2章以降の構成：未然防止につながる四つの視点



3 神奈川県教育委員会の取組み

(1) 不登校対策検討委員会のこれまでの取組み

平成19年8月に公表された学校基本調査結果で、神奈川県公立小・中学校における平成18年度の不登校児童・生徒数が大幅に増加したことが示されました。神奈川県教育委員会は、このことを重く受けとめ平成19年10月に「不登校対策検討委員会〔注6〕」を設置しました。以来、本県の不登校の現状を、長期欠席に占める不登校の割合や欠席日数別不登校の割合といった視点から分析・検討を行い、学校及び市町村教育委員会等に対して、不登校の未然防止や不登校児童・生徒の学校生活に向けた、有効な手立てを示してきました。

平成20年に作成された登校支援リーフレット「登校支援のポイントと有効な手立て」では、児童・生徒一人ひとりのニーズに即した適切な支援方法が示され、不登校の未然防止や不登校児童・生徒の学校生活の再開に向けて、教師がどう取り組んでいくべきかが具体的に説明されています。県内公立小・中学校に配布されているこのパンフレットを、不登校対策のために校内研修等で活用していくことが求められます。

このリーフレットの主な内容は、

- 1 登校支援が必要な子どもをチームで支援する校内体制
 - 担任・教科担当は、子どもの良いところを認め、小さなことでも褒めるようにしよう！
- 2 初期対応の心得
 - 3日連続の欠席への対応は登校支援の第1歩
- 3 保護者の目線で、保護者と共に考える登校支援
 - 「迅速！丁寧！親切！誠意！」
- 4 不登校対策の効果的な取組み
 - 欠席があると学校側が積極的に働きかける
- 5 小・中学校間や他機関との連携の推進



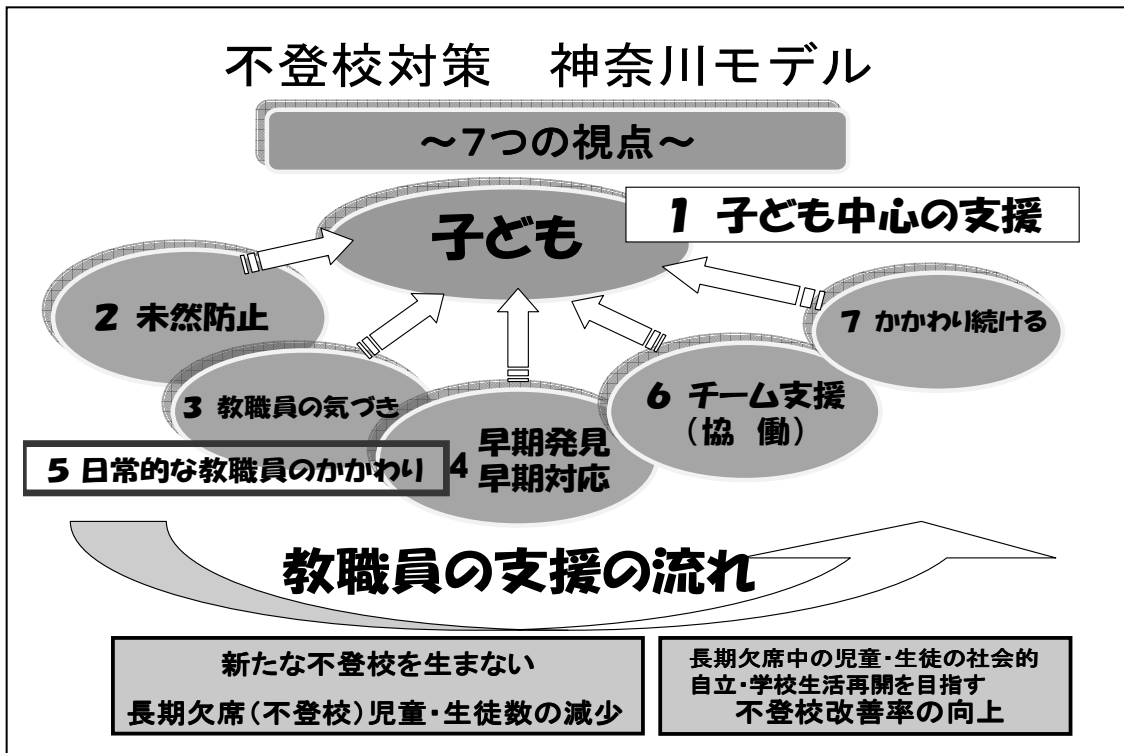
〔注6〕不登校対策検討委員会は、横須賀市、厚木市、南足柄市、小田原市教育委員会における不登校対策を推進するために、ワーキング部会を設けている。



(2) 不登校対策検討委員会最終報告

不登校対策検討委員会は、平成23年5月に報告書【最終版】をまとめ、その中で次のように述べています。そして、神奈川県の不登校対策として「不登校対策 神奈川モデル ～7つの視点～」を整理し示しています。

「未然防止」「早期発見・早期対応」「不登校児童・生徒への登校支援」の3観点を充実させ、新たな不登校を生まないことと、長期欠席及び不登校児童・生徒数の減少を図り、長期欠席（不登校）児童・生徒に対しては、継続的な登校支援を行い、児童・生徒の社会的自立を目指した教育活動をしていくことは本来の「教育」である。
(神奈川県教育委員会 2011 不登校対策検討委員会報告書【最終版】 p. 2)



第5図 不登校対策 神奈川モデル



ここがポイント

- 欠席日数等の変化を敏感に捉え早期に対応していくこと
- 学校が子どもにとって安心できる居心地のよい場所であること
- 授業が子どもにとってわかりやすく意欲的に取り組める内容であること

【第5図】平成23年『神奈川県不登校対策検討委員会報告書・最終版』より
<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/366050.pdf>

2章

わかる喜びのある授業

不登校の未然防止に向けた重要なカギの一つに、授業づくりがあります。授業づくりは、児童・生徒の思いや願いに寄り添うことが大切です。また、言語活動や体験活動など、児童・生徒が主体的に学ぶ場面を取り入れることが、いまの授業には求められています。

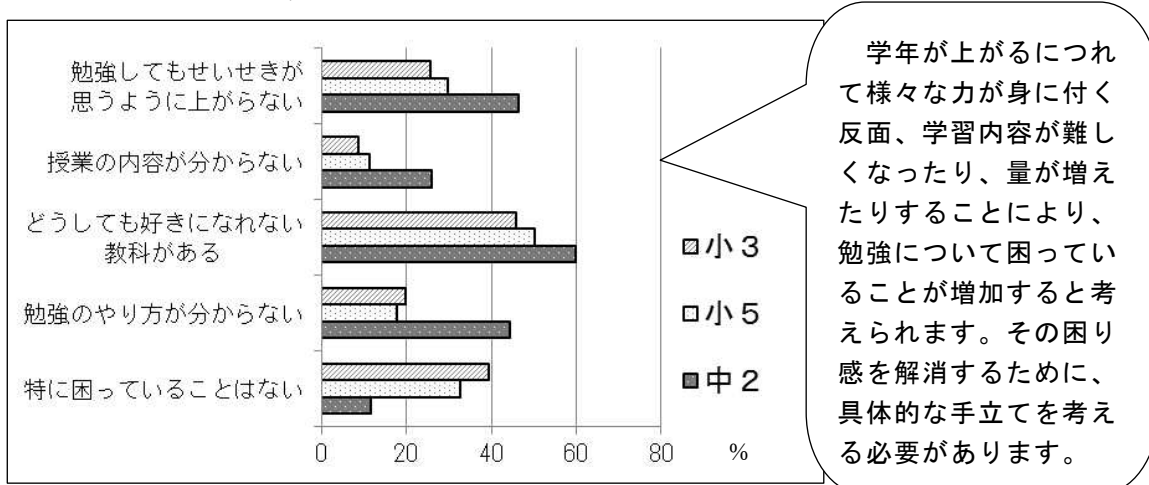
この章では、神奈川県内の小学校、中学校、高等学校の取組みのいくつかを紹介しながら、不登校の未然防止につながる授業づくりについて考えます。



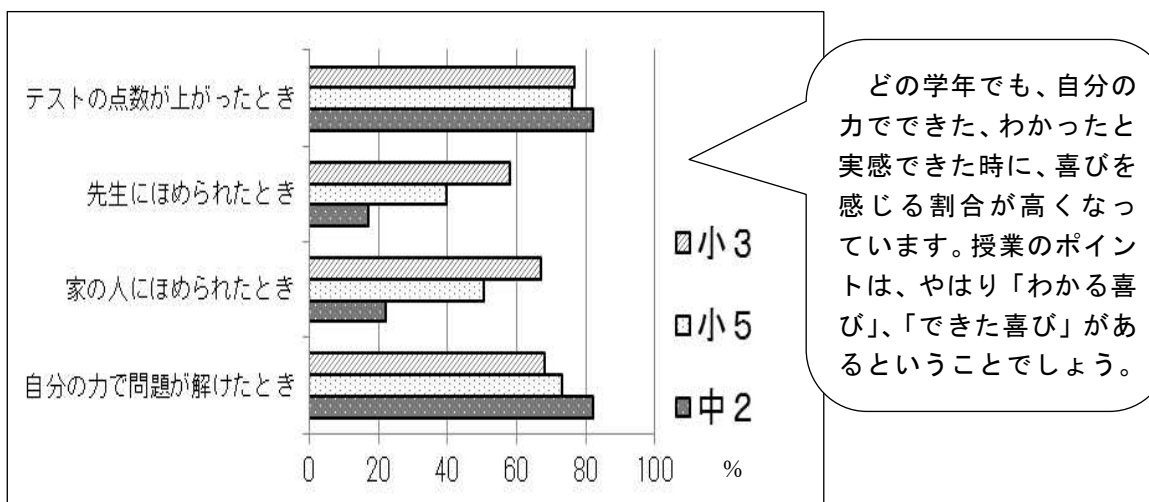
1 | 児童・生徒が望んでいること

学校生活でほとんどの時間を費やすのが授業です。教師は、児童・生徒が「わかる喜び」や「できる楽しさ」を実感できる授業をしなければなりません。児童・生徒が「楽しい」「面白い」と思うような授業をすれば、学校へ行きたいという気持ちが自然に湧き出てくるでしょう。では、児童・生徒は、毎日の授業に対してどのような願いや思いを持っているのでしょうか。

神奈川県教育委員会が行った、「神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査」及び「神奈川県立高等学校学習状況調査」の結果の一部から、授業に対する児童・生徒の願いや思いを読み取ることができます。

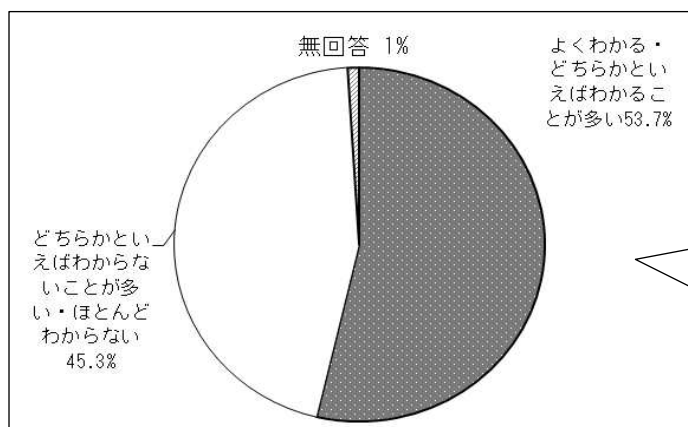


第6図 勉強について困っていること（小・中学校）



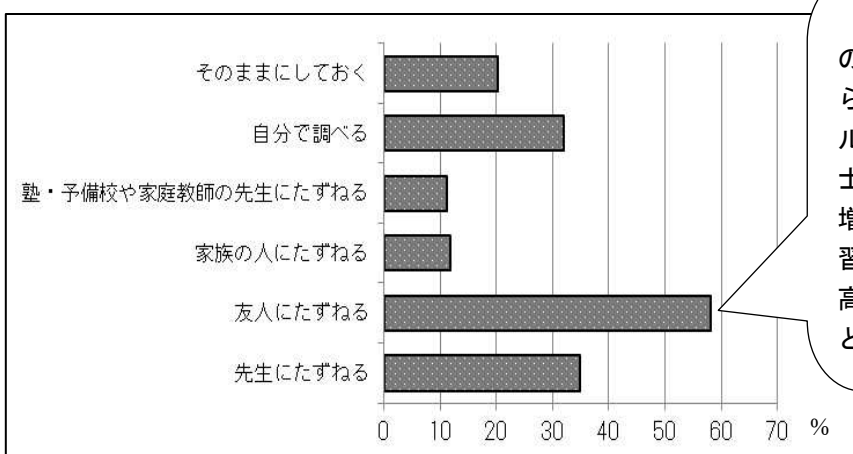
第7図 勉強していてうれしいと感じるとき（小・中学校）

【第6図・第7図】 小3と小5の数値は、「平成22年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査結果のまとめ」より一部抜粋。中2の数値は、「平成21年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査結果のまとめ」より一部抜粋。



第8図 学校の勉強についての理解度（高等学校）

学習内容を理解できなければ、生徒にとって授業が楽しいはずがありません。教師は、生徒が学習内容を理解できるようにするために、指導方法や学習形態等の工夫をする必要があります。



第9図 授業でわからないことがあったときどうするか（高等学校）

「友人にたずねる」の回答が多いことから、ペアワークやグループ活動で生徒同士が学びあう場面を増やすことにより、学習に取り組む意欲を高めることができると考えられます。

ここに示したものは、学習状況調査のほんの一部です。「ほめて伸ばす」とよく言われますが、調査結果からは、自分の力で問題が解けたりテストの点数が上がったりするほうが嬉しいということがわかります。また、授業の中で学び合い、教え合う場面を増やしていくことも大切です。教師は、授業の内容を児童・生徒が理解できるようにするための工夫や努力を、今まで以上にしなければならぬと言えるでしょう。



ここがポイント

- 児童・生徒の困り感を理解し、児童・生徒に寄り添うことが大切
- 自分の力で「わかった」、「できた」と実感させることが喜びにつながる
- ペアワークやグループ活動による学び合いを取り入れることが効果的

【第8図・第9図】 「平成23年度神奈川県立高等学校学習状況調査報告書」より一部抜粋。



2 | いま求められている授業とは

新しい学習指導要領では、「生きる力」を育むという理念のもと、基礎的・基本的な知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力等の育成、そして主体的に学習に取り組む態度を養うことを重視しています。私たち教師は、新学習指導要領の趣旨を十分理解し、児童・生徒に確かな学力を身に付けさせなければなりません。

1章で述べたとおり、不登校の児童・生徒の中には、「学業不振」が原因で不登校になってしまったという事例もあります。新たな不登校児童・生徒を生み出さないためにも、教師は「わかる喜びのある授業」をつくることが求められます。

また、前項の内容からもわかるとおり、児童・生徒は、「勉強ができるようになりたい」、「わかるようになりたい」と願っています。そして、「友達と一緒に学びたい」と思っているのです。では、児童・生徒の願いや思いに応えられる授業とはどのような授業なのでしょう。ここでは、授業づくりにおいて大切にしたいことについて考えます。



授業において教師は、児童・生徒に身に付けさせたい力を明確にするとともに、児童・生徒に授業の目標やめあてを明確に持たせることが重要です。児童・生徒の学力向上を目指すとは言っても、いわゆる「詰め込み型」の授業では、児童・生徒にとって楽しい授業にはなりません。受身の授業ではなく、児童・生徒が主体的に授業に参加し活躍できるような場面を設定することが求められています。そのための手立てとして、「言語活動」や「体験活動」を積極的に取り入れることが挙げられます。

また、「わからないことがわかるようになる」のが授業です。授業では、児童・生徒が「わからないことをわからない」と言える雰囲気をつくったり、児童・生徒の興味・関心や疑問を踏まえた学習課題を設定したりすることが重要と言えます。そして、ペアワークやグループ活動など、児童・生徒が伝え合いや教え合いを通して、主体的に学習課題を解決できるような学習形態が求められています。

コラム A：横浜国立大学 高木展郎教授からのメッセージ

「なぜ、学校に行くの？」と聞くと、「友だちに会えるから」と答える児童・生徒が多い。本来、学校は知らないことを習う場であり、わからないことがわかるようになり、できないことができるようになる場である。「知らないことがある」、「わからないことがある」、「できないことがある」から、学校に来て学習をするのである。

そして、知ることの喜び、わかることの喜び、できることの喜びを児童・生徒が、自ら獲得することに大きな意味がある。それは、ほかの児童・生徒と教室の中での関わりを通じたコミュニケーションを行うことによって、初めて可能となる。

したがって、単なる知識の伝達をするだけでは、教師とはいえない時代を迎えている。児童・生徒が学習の楽しさ、喜びを持つようなコミュニケーションのある授業のファシリテーター、コーディネーター、アドバイザー、カウンセラーとしての役割が、これからの時代の教師に求められている。



ここがポイント

- 身に付けさせたい力を明確に設定した授業
- 児童・生徒の興味・関心を踏まえ、学びやすい学習環境を整えた授業
- 言語活動や体験活動等を積極的に取り入れた、コミュニケーションのある授業

3 未然防止につながる授業のポイント

(1) 一人ひとりのよさや違いを生かした授業

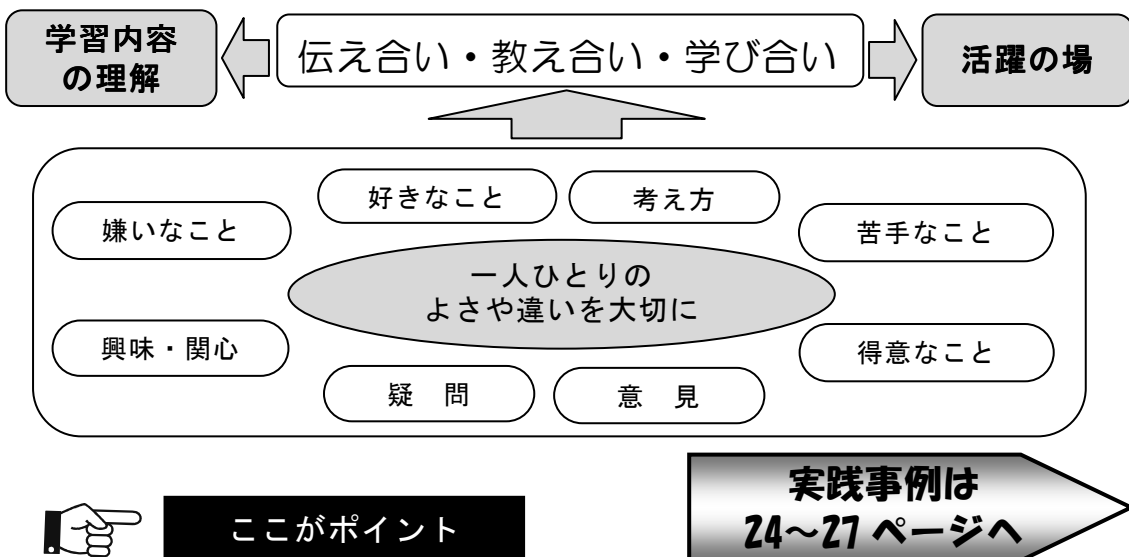
学校には多くの特質があります。その一つに「集団で学ぶ」ということがあります。『生徒指導提要』には、「集団指導を通した『個の育成』」について次のように記されています。

(2) 集団指導を通した「個の育成」

人間は容姿、性格、興味、関心、考え方など、一人一人に違いがあるからこそ意味があります。違った人同士が互いの個性を理解し尊重し合うからこそ、豊かな人間関係が作れるのです。例えば、集団において、人と異なる意見であっても、自由に自分の意見を述べ、お互いに理解し、尊重し合うことは、自他ともに成長する契機となります。(中略) 教員は、それぞれの集団に属している一人一人の児童生徒のよさや違いを大切にして、集団の中で、各自が持っている個性を伸ばすことが、結果的に集団の発展にも結び付くことになるということを強く意識する必要があります。

(文部科学省b 2010『生徒指導提要』p15)

学級には、例えば計算が得意な子と苦手な子がいたり、学習内容の理解が早い子と時間がかかる子がいたりしますが、授業の中で互いに教え合う関係ができれば、素晴らしいことです。また、考え方や意見が違って、お互いを尊重する態度を育てることも大切です。「よさや違いを大切にする」には、まず、そのよさや違いを受け入れることが必要です。そして、それらを生かして授業を構想し、授業づくりをすることが、伝え合い・教え合い・学び合いのある授業を展開することにつながるのです。



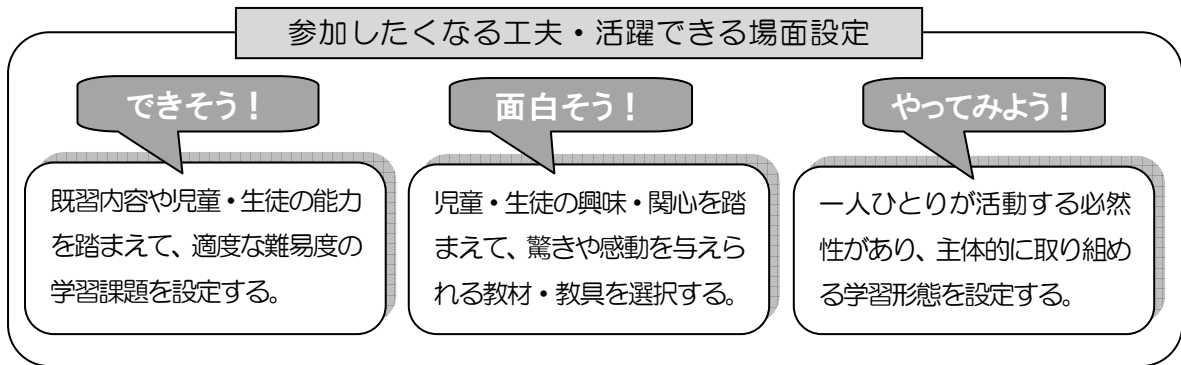
ここがポイント

実践事例は
24～27 ページへ

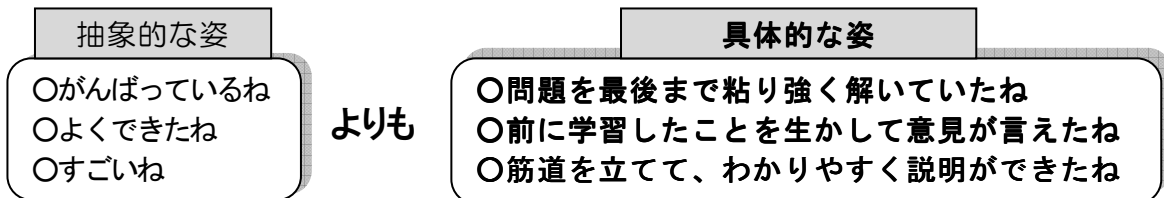
- 一人ひとりのよさや違いを認め合い、集団で学ぶ授業
- 伝え合い・教え合い・学び合いのある授業

(2) 活躍できる場面がある授業

児童・生徒に学習内容を理解させ、「できた」「わかった」と実感させるためには、教師は、児童・生徒が授業に参加したくなる工夫をしたり、活躍できる場面を設定したりしなければなりません。つまり、授業の中に児童・生徒の居場所をつくるのが、不登校の未然防止につながるのです。



「この資料を見たら、あの子はこんなことを考えそうだ」とか、「こういう発問をしたら、多様な意見が考えられるから、多くの生徒が発言できそうだ」というように、教師が児童・生徒の具体的な姿を想像することが、一人ひとりに寄り添った授業づくりにつながります。そして、実際の授業でも、児童・生徒の活動の姿を丁寧に見取り、できるだけ具体的に評価することが必要です。



具体的な姿を評価することにより、児童・生徒の活動のよさを、児童・生徒に明確に伝えることが出来ます。このように、活動を価値付けたり意味付けたりすることにより、児童・生徒は、「先生は自分のことをよく見てくれている」、「努力したことが伝わった」などと感じるとともに、自分ができたことを実感することができるでしょう。



ここがポイント

実践事例は
28～31 ページへ

- 参加したくなる工夫・活躍する場面のある授業づくり
- 児童・生徒の具体的な姿を価値付け、意味付けする適切な評価

(3) 「ユニバーサルデザイン」を取り入れた授業

児童・生徒に授業に取り組もうという意欲があっても、学習環境が児童・生徒に適したものでなければ、集中できなかったり、困難を感じたりするだけの授業になってしまう場合があります。そこで、不登校の未然防止の手立ての一つとして、「教育のユニバーサルデザイン」を授業に取り入れることが考えられます。

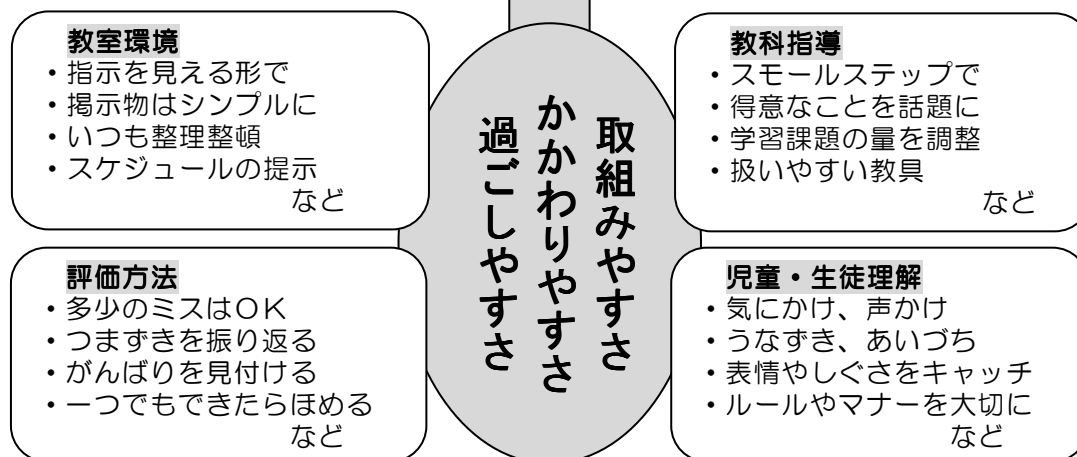
教育のユニバーサルデザインとは・・・

すべての子どもは、一人ひとりがユニークな（独自の）存在であり、そのユニークさに寄り添った教育活動が行われなければなりません。

このとき、一人の子どもから始めた支援の内容を、他の子どもにも使える教え方、環境設定、カリキュラム等に広げて行くことができます。これは、ある子どもたちに有効な方法を共通化させ、デザイン化するものであり、これを教育のユニバーサルデザインと名付けることができます。

(神奈川県立総合教育センター 2010 『明日から使える支援のヒント～教育のユニバーサルデザインをめざして～』p1 HPからダウンロードできます)

誰もが学びやすくなる！



ここがポイント

実践事例は
32～35 ページへ

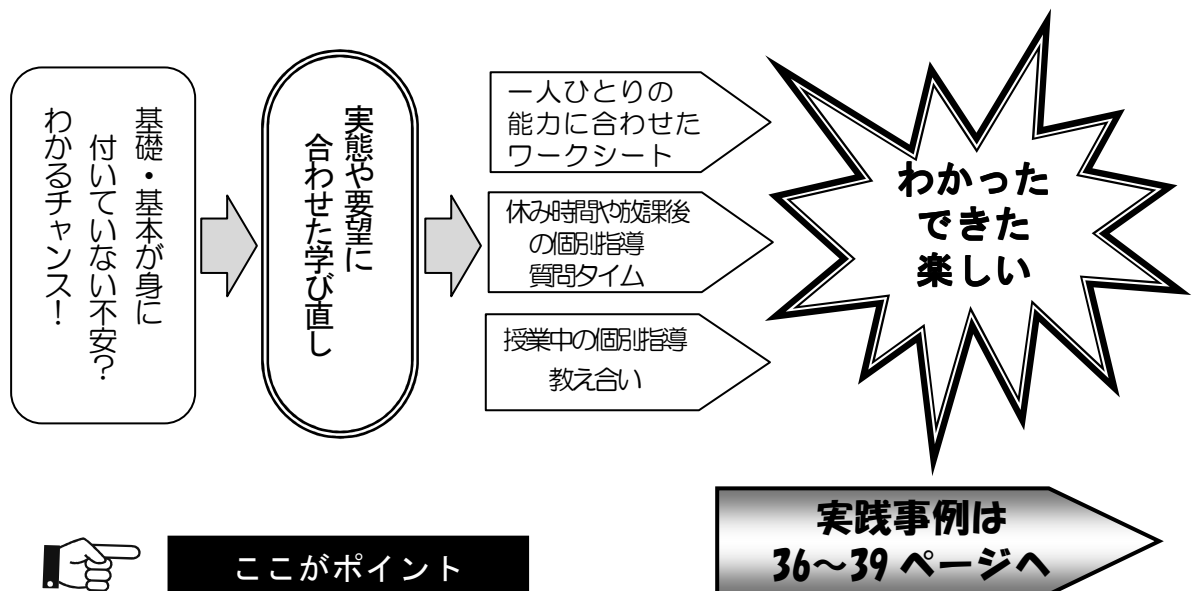
- 「学びにくさを持っている児童・生徒がいる」という考えが前提
- 「学びやすさ」は学習意欲を高める
- 「ユニバーサルデザイン」の活用を！

(4) 基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る授業

不登校を経験した児童・生徒は、不登校だった時期の学習内容を十分理解していないことが予想されます。進級や進学をきっかけに登校するようになっても、それまでの学習内容が定着していなければ、授業についていくことは難しくなります。不登校を経験していない児童・生徒であっても、学習内容をしっかりと身に付けていなければ同じことが言えます。いずれにしても、このような状況では、授業が楽しいはずがありません。せっかく登校できるようになったとしても、学業不振が原因で、再び不登校になってしまうことも考えられます。

そこで、児童・生徒の登校意欲を低下させないために、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る「学び直し」が必要となる場合があります。

「学び直し」の場面や方法は様々ですが、ここで配慮したいことは、あくまでも児童・生徒の実態を踏まえたり、要望に応えたりして、「学び直し」をするということです。既習内容の定着が不十分だからと言って、教師が一方的に学習をさせたのでは、かえって逆効果となります。また、できないことがあることはマイナスではなく、それは、「できるようになるチャンス」だと、教師自身がプラスと捉えることも、児童・生徒に安心感や意欲を与えることとなります。



- わからないことがあることは、できるようになるチャンス！
- 実態や要望に合わせて、場面や方法を工夫する
- 授業中・休み時間・放課後など、様々な時間を活用する

4 | 具体的な取組み

(1) 「聴いて 考えて つなぐ学習」で不登校が解消！

厚木市 A小学校

学校の規模

○児童数：約900名、学級数：31学級（うち特別支援学級数：3学級）

学校の課題

- 児童一人ひとりの基礎学力の差が大きい。
- 授業中に立ち歩く、教室に入れない、登校できない等、学校生活への適応が苦手な児童がいる。
- 内容を理解し、自分の考えを持って、反応しながら聴く力が不十分な児童がいる。

A小学校では、児童が学習に真面目に取り組む意欲はあるものの、基礎学力の個人差が大きいという課題がありました。また、授業中に立ち歩いたり教室に入れなかったりする児童も見受けられ、教師はその原因を、授業の中にその子の居場所がないことだと考えました。そこで、授業中にわからないことがあって困っている子を始めとして、学級の誰もが安心して発言できるような雰囲気をつくることが、課題解決につながると考えました。そして、次のような願いを持って授業づくりに取り組んできました。

授業づくりに向けた教師の願い

- 授業の中に児童の居場所をつくろう。
- 「あたたかい聴き方」や「やさしい話し方」を育てながら、「思考力、判断力、表現力」や「主体的に学習に取り組む態度」を育てたい。
- 「聴く力」「話す力」を伸ばすための言語能力を育てたい。
- 教師自らが、児童の考えをよく聴くようにしよう。

児童の学力の基礎・基本を充実させるために、国語科をすべての教科の基礎・基本と考え、平成17年度から国語科の研究を進め、平成19年度からは、授業改善への取組みを始めました。そして、平成20年度からは、「学ぶ力の育成～『聴いて 考えて つなぐ学習』を通して～」を研究テーマとし、現在は、国語科はもとより、全領域に広げて「聴いて 考えて つなぐ学習」による実践を積み重ねています。

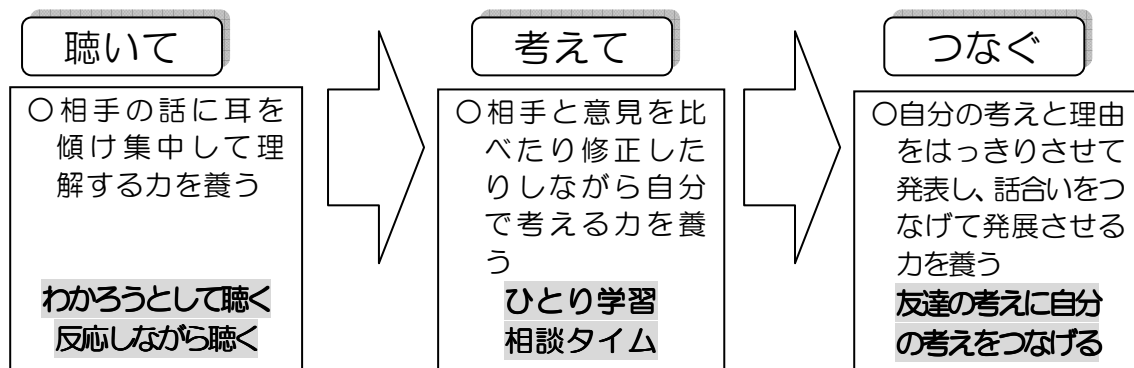
課題解決に向けた取組み

- 「聴いて 考えて つなぐ学習」を展開する。
- わからないことや困っていることから始まる授業をつくる。
- 児童同士がお互いを認め合える雰囲気をつくる。
- 「ひとり学習」や「相談タイム」により、全員参加の授業をつくる。
- 言いたがり屋さんより「あたたかく聴ける子」を育成する。

A小学校では、一点目の「聴いて 考えて つなぐ学習」の展開を授業づくりの中心に据えて、ほかの取組みを関連付けながら、課題解決に向けて実践しています。ここでは、その一部を紹介します。

◆実践内容の紹介◆**「聴いて 考えて つなぐ学習」の展開**

「聴いて 考えて つなぐ学習」では、友達の話をわかろうとして聴く場面、自分の考えと友達の考えを比べて修正する（考える）場面、そして自分の考えと友達の考えをつなぐ場面の3つが授業の中に設定されています。それぞれの場面で育てたい力を明確にすることにより、児童一人ひとりの考えを生かした授業が展開されています。



授業においては、教師も児童も、まず「聴く」ことを大切にしています。それは、発言者の考えをわかろうとして聴くことで、その考えを理解し、自分の考えと比べたり新たな考えを生み出したりすることにつながるからです。また「話す」時には、聴き手を意識して話すことを大切にしています。

教室には、「あたたかい聴き方」、「やさしい話し方」の具体的な姿として、次ページに示した「聴き方 あいうえお」と「話し方 たちつてと」が掲示されています。



聴き方 あいうえお

- あ 相手の目を見て聴こう
- い いっしょうけんめい聴こう
- う うなずきながら聴こう
- え えがおで聴こう
- お おわりまで聴こう

話し方 たちつてと

- た ただしい姿勢で話そう
- ち ちょうど良い声の大きさと話そう
- つ つなげて話そう
- て ていねいにわかりやすく話そう
- と とう台になって話そう

※「とう台になって」とは、クラスの友だちを見回しながら、みんなに向かって話すこと。

こうした具体的な姿は、相談タイムや学級全体の話し合いの場面で、他者を意識した聴き方や話し方の基本となっています。

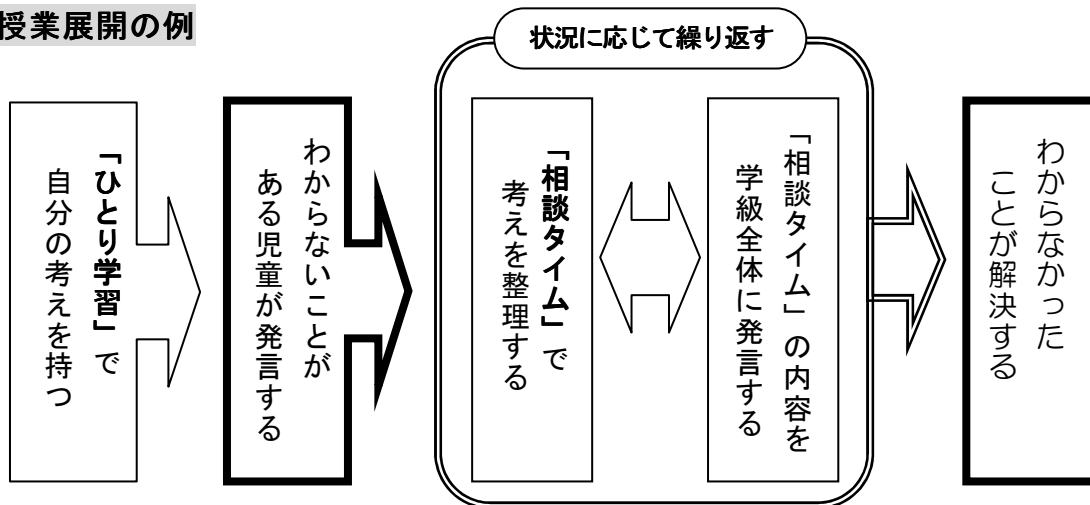
児童は、自分の考えを学級のみんなが聴いてくれることを実感することにより安心感を得るとともに、学級があたたかい雰囲気にも包まれ、授業が楽しいと感じるようになります。

わからないことや困ったことから始まる授業

授業では、わからないことがある児童の発言を受けて、教師が「〇〇さんのわからないことを解決していこう」という投げかけから始まります。それは、「わからないことがあるから考えられる」、「困ったことがあるからみんなでき解決できる」という考え方が基本だからです。

わかることから始まる授業では、わからないことや困ったことがある児童は参加しにくくなります。また、わからないことに恥ずかしさを感じ、学習意欲も低下してしまいます。しかし、わからないことから始まる授業なら、誰でも安心して授業に向かうことができます。そしてわからないことや困ったことをみんなで考え、解決することにより、わかる喜びや解決できた喜びを児童に味わわせることができるのです。

授業展開の例



全員参加の授業のための手立て

学級の児童全員が授業に参加するには、一人ひとりが自分の考えを持つことが必要です。そのために、A小学校では、「ひとり学習」と「相談タイム」を取り入れています。

ひとり学習

この活動は、自分だけで集中する場です。自分の考えを持つことで、その後の、相談タイムや学級全体での話し合いに参加しやすくなります。また、わからないことや困ったことなどが出てくる場合もあり、そのことは、授業のきっかけとなります。

相談タイム

学級全体での話し合いに入る前に、座席が近い児童が4人くらいで向き合ってお互いの考えを伝え合う時間が相談タイムです。大勢の前では話すことが苦手な児童も、発言というのではなく、文字通り「相談」という雰囲気話しやすくなります。

児童同士がお互いの考えをつないでいく授業が展開されるように、教師は、児童の考えを引き出すための発問や指示をします。教師が、一方的に話し続けることはありません。「ひとり学習」と「相談タイム」を通して、全員が学習課題を捉えることにより、全員参加の学習が展開され、話し合いが深まっていきます。

◇取組みの成果◇

- 「自分が活躍できた」、「学習内容を理解できた」ことを児童が実感し、授業が楽しいと感じるようになった。
- 平成20年度には、不登校児童が5名いたが、平成22年度には、解消された。

「聴いて 考えて つなぐ学習」を通して児童は、自分の考えを聴いてもらえたり、自分の考えを話したりすることができました。自分が授業で活躍できたことや、学習内容を理解できたことも実感するようになりました。

その結果として、A小学校では不登校の解消につながりました。不登校の未然防止には、学校全体で徹底して授業づくりを考え、実践していくことが大きな効果を上げるといえるでしょう。

4 | 具体的な取組み

(2) 授業研究による学校改革で不登校生徒が減少！

横須賀市 B中学校

学校の規模

○生徒数：約430名、学級数：15学級（うち特別支援学級数：3学級）

学校の課題

- 20年以上前に、いわゆる「荒れた」状態で、落ち着いた学校生活を送ることが困難であった。
- 教師が生徒指導に追われ、学力向上への取組みが十分行き届かなかった。
- 不登校生徒が多かった。

B中学校の教師は、「荒れた」状態を改善しようと、生徒指導に熱心に取り組んできました。しかし、生徒指導という形で学校を立て直そうとしても、「根本的な解決」にはならないと考えました。そこで、学校の課題解決の方策として、「生徒指導」の研究ではなく「授業研究」を選択しました。よりよい授業づくりに取り組むことによって、授業や学校に生徒の居場所をつくれれば、生徒は落ち着いた学校生活を送るようになるだろうと考えたのです。

「授業研究」に取り組むに当たって教師は、次のような願いを持って取り組んできました。

授業づくりに向けた教師の願い

- 学校に生徒の居場所をつくろう。
- 生徒一人ひとりが授業中に力を発揮できる場面を用意しよう。
- 生徒同士、生徒と教師が認め合う関係をつくろう。
- 生徒に自己肯定感を抱かせ、学力向上につなげよう。

この教師の願いは、「一人ひとりの生徒を見つめ、認め合い、学び合いのある学校をつくる」という学校目標に反映されています。そして、平成23年度の重点目標には、「①生徒に寄り添い、生徒と共にある場を第一とする」、「②生徒同士が認め合い、学び合いのある授業を追求する」ということが示されています。授業づくりの方針を明確にして、生徒一人ひとりに寄り添い、丁寧に見つめ、全教職員で授業づくりに取り組んでいることが伝わってきます。

研究テーマは20年以上継続して、「個を理解し、個にせまり、個を生かす」です。20年以上前から「学び合い」に目を向け、生徒全員が授業に参加することや、生徒同士や教師と生徒が認め合える関係づくりを重視し、「個に寄り添う授業づくり」に向けて、次のような取組みをしています。

課題解決に向けた取組み

- グループ活動を取り入れ、生徒同士の認め合いや学び合いの場をつくる。
- 「授業記録」を活用して、生徒や学級の様子を教師間で共有する。
- 「振り返りシート」を生徒に記入させ、授業ごとの生徒の感想を把握する。
- 「教科三者面談」を実施し、教科担当も個々の生徒へのアドバイスを行う。
- 月2回のペースで校内研究授業を行う。

◆実践内容の紹介◆

一人ひとりが力を発揮できるペア学習・グループ活動

ペア学習やグループ活動を授業に取り入れる大きな理由は、個々の表現の場の保障と生徒の安心感の醸成です。一斉授業では、教師の話や友達の発言を聞くだけになりがちな生徒でも、ペア学習やグループ活動では、次のような効果が期待できます。

- すべての生徒が授業に参加できる。
- 一斉授業では、なかなか発言できない生徒でも、発言の機会を得やすい。
- 少人数なら、わからない部分を友達に質問しやすい。
- 教師が、生徒一人ひとりのグループ内での役割を捉えやすい。
- グループごとに生徒の様子を見取ることにより、一斉授業より生徒の個性が捉えやすい。

このような効果がペア学習やグループ活動にはありますが、ただ単にやらせるだけでは、十分な効果を得ることはできません。B中学校では、これらの効果を十分得るために、ペア学習やグループ活動をすべての教科で取り入れたり、3年間を見通して長期的に取り組んだりしています。

長期的に繰り返し取り組み、必要に応じて活動の仕方を指導することにより、生徒がグループ活動に慣れ、学び方を身に付けることになります。そして、1年生からの積み上げにより、生徒同士が安心して意見を言い合える関係ができました。また、自信を持って挙手したり発言したりするなど、生き生きと学習に取り組むようになりました。

一人ひとりの生徒を見つめ、生徒理解を深める授業記録

下の表は、授業中の生徒の様子を見取り、そのことを教師間で共有するための「授業記録」の一部です。この用紙は、1日1枚、学年の全4クラス分の授業だけでなく、朝、昼休み、放課後の時間帯についても記録できるようにつくられています。全学年が1日1枚必ず記録を取ることを、毎日継続して行っています。

記録のポイント

- 授業の担当者が、授業終了後すぐに記入する。
- 生徒の様子で気付いた点を、個人名を挙げて記入する。
(生徒が力を発揮した場面や努力した姿、生徒同士のトラブルの様子など)

☆授業の様子 月 日 () 天気

	1組	2組	3組
朝			
1	国	理	英
2	技	家	国
3	家	技	社

BさんがCさんを注意して、ちょっとトラブルになったから、配慮が必要。様子を見て声をかけを・・・。

Aさんが、自信をもってスピーチすることができていた。

↓

次の授業者は、必ず確認してから授業へ行く。

第10図 授業記録シート

授業者は、必ず自分の授業で気付いた生徒の様子をこの用紙に記録し、次の授業者は、必ずそれを確認してから授業へ向かいます。この記録内容は、次の時間の授業に生かしたり、生徒一人ひとりを多面的に見たりする材料となっています。

この用紙はファイルにまとめてあり、教師はいつでも見ることが出来ます。こうした情報収集により、一人ひとりの生徒理解が深まり、授業中のきめ細やかな対応ができるようになりました。

【第10図】 B中学校への聞き取り調査内容を参考に作成。

日々の授業を充実させるための校内研究授業

B中学校では、日々の授業をより充実させるために、次の二つの形式で月2回のペースで校内授業研究に取り組んでいます。

- 形式1** 教師を3グループに分けてグループ内で授業を参観し合う
形式2 全校一斉に特定の教科や道徳の時間を参観する

実施に当たっては、次のような工夫をしています。

ア 「座席表」を活用した授業参観と研究協議

「座席表」は、個の見取りを重視するという観点で活用しています。「座席表」には、生徒一人ひとりの普段の授業の様子と本時で期待するポイントが書かれています。また、特に注目してほしい生徒として「注目児」を授業者が設定し、「座席表」に明記します。参観者は、「注目児」の反応を中心に授業の様子を見取ります。そして、「注目児の様子」や「グループ活動時の声掛け」等、事前に示された参観のポイントに沿って研究協議が行われます。そのため、協議の視点がぶれることなく、話し合いは深まります。

イ 時間確保のための手立て

校内授業研究を定期的に行うために、前年度のうちに校内授業研究の日程を年間計画に組み入れるといった計画的な準備を行っています。また、職員会議の効率化を図るために、事前に部会を行い、議題を絞り込んでいます。さらに、体育祭の代わりに陸上競技会としたり、合唱大会を行わないようにしたりするなど、行事の精選と準備時間の削減等を行い、時間の確保に努めています。

こうした校内研究授業の工夫から、徹底して日々の授業をよりよいものにしてしようという教師の願いが伝わってきます。生徒一人ひとりを見取る力や関わり方など、教師の授業力を向上させることが、生徒一人ひとりに寄り添う授業づくりにつながります。

◇取組みの成果◇

- 生徒が自己肯定感を抱くとともに、学力向上が図られた。
- 「学校が好き」という生徒が増え、不登校が減少した。

「学校に生徒の居場所をつくろう」という願いを持ち、20年以上継続した取組みにより、現在のB中学校では、生徒が落ち着いて学校生活を送ることができています。工夫を積み重ねた校内授業研究の取組みにより、生徒が授業中に積極的に発言する姿や、教え合いや励まし合う様子などが見られるようになりました。生徒を大切に、授業の中に生徒の居場所をつくることは、不登校の未然防止に大きな効果があるといえるでしょう。

4 具体的な取組み

(3) 支援教育を基盤にした授業づくりで不登校生徒が減少！

横須賀市 C中学校

学校の規模

○生徒数：約360名、学級数：12学級（うち特別支援学級数：2学級）

学校の課題

- 10年近くにわたり、恒常的に不登校生徒が多い。
- 発達の遅れに悩む生徒が多く、教科学習に対する困難さ、学びにくさがみられる。
- 全体的に落ち着きがなく、規範意識の低下がみられる。

C中学校では、昭和60年に不登校生徒のための「情緒障害学級・相談学級」が開設されて以来、不登校問題に取り組んできています。平成15年頃には、月によって全生徒の約8パーセントが不登校となったこともあり、学校を挙げて不登校対策に取り組んできました。

その中で教師は、不登校になる原因の一つと言われている、「学級・学校を構成する人的環境や学習展開との不適合」と「発達の障害」に視点を当て、障害のあるなしに関わらず、通常学級に在籍するすべての生徒にとって居心地のよい学級づくりや授業の展開こそ、不登校の解決につながると考え、不登校の解消と未然防止に、全校体制で取り組んできました。

授業づくりにおいては、通常学級には様々な支援が必要な生徒が共に学んでいることを前提に、次のような願いを持ち授業改善に取り組んできました。

授業づくりに向けた教師の願い

- すべての生徒にとって、わかりやすく楽しい授業をつくりたい。
- 発達に課題のある生徒の「学びにくさ」を取り除きたい。
- 学ぶこと、集うこと、関わるのが楽しい学校生活にしたい。
- 毎日の授業を通して生徒と共に育ち、学校の教育力を高めたい。

校訓「楽校のココロ 受け容れよう・話しあおう・傷つけない・自分づくり」からは、教師が、「学校を生徒にとって楽しい場にしたい」、「安全で安心できる学校を取り戻したい」という願いが伝わってきます。

校内研究テーマを、「『支援教育を基盤にしたわかる授業の展開』～ユニバーサルデザインの授業で行う楽しい学校づくり～」と設定し、すべての教科で、どのように生徒一人ひとりの困り感や教育的ニーズを理解し、どのように授業展開することが必要なのかという研究に取り組んできています。

授業には、「できるだけ多くの人利用可能であるようにデザインすること」を基本とする「ユニバーサルデザイン」の考え方を取り入れ、「学びにくさを持っている生徒に対しての教育内容、教育環境、指導の工夫が、そのまますべての生徒にとってわかりやすく、ためになる」という理念を掲げ、生徒と共に育ち、学校の教育力を高めようとして、次のような取組みをしています。

課題解決に向けた取組み

- 教室整備による学習環境の向上。
- ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくり。
- 個別学習支援システムの構築と個別学習支援教室の設置。
- 楽しい学校づくり小委員会、校内支援委員会の設置。

校内研究を推進するに当たっては、生徒一人ひとりの特性に合わせた授業づくりのために、「見通しを持たないと落ち着いて授業に臨めない」、「聞くだけでは、長文の指示を理解できない」、「読みが困難」、「短期記憶が弱いため、板書が正確に写せない」、「2つ同時に指示があるとパニックになる」などの学びにくさについて、全職員で理解を深めました。そして、学びにくさを持つ生徒には「ないと困る支援」や、どの生徒にも「あると便利な支援」を増やす必要性を認識しました。ここでは、その一部を紹介します。

◆実践内容の紹介◆

ユニバーサルデザインを取り入れた授業づくり

「学びにくさを持つ生徒」に対する支援として、ユニバーサルデザインの視点から「授業を組み立てる際に大切にしている構成要素」を授業に取り入れました。

授業を組み立てる際に大切にしている構成要素

- ① 授業の目標と流れを明示する。
- ② 黒板周辺や机上を整理させる。
- ③ 説明や指示を短くする。
- ④ 指示の際、一文一動作を心がける。
- ⑤ わかりやすいプリントをつくる。
- ⑥ 「学び合い」を進める。
- ⑦ 視覚・聴覚・運動覚的な手立てを工夫する。
- ⑧ 指示に対して、個の見取り（理解）を意識する。
- ⑨ 授業の構造化を意識する。
- ⑩ 教科に応じた視点を工夫する。

(下線は総合教育センター)

前のページで示した、「授業を組み立てる際に大切にしている構成要素」の中から、具体的な授業実践での工夫例を紹介します。

授業の目標と流れを黒板に提示する

○月◇日（△曜日） 「相似な図形」

授業の目標
相似な図形の性質を見つけ理解できる。

授業の流れ

- 1 授業の流れと目標（学習内容）を確認する。
- 2 前時の復習をする。
- 3 相似な図形の性質を確認する。
- 4 問題を解く。
- 5 答え合わせをする。
- 6 まとめと反省をする。

左の図のように、授業の目標と流れを明示することで、学習に見通しを持たせることができました。

また、ワークシートに目標を記入させたり、授業の流れをパターン化したりする工夫により、活動内容が明確になり学びやすさにつながりました。

第 11 図 1 時間の授業の目標と流れ

わかりやすいプリントをつくるための視点

学校では口頭の言語指示が多く、言語指示をうまく受け止めることができない生徒もいるため、視覚的な支援が入ることで学びやすさを感じる場合があります。ワークシートは、文字や表などによる視覚的な指示が優位であるため、教師の指示がなくても生徒が一人で活動に取り組みます。学びやすさを高めるために、C中学校では、ワークシートの作成に当たっては、次のような視点を大切にしています。

- 読めない漢字がある生徒への支援として、ルビをふる。
- 板書を写しやすくするために、板書とワークシートの構成を同じにする。
- 授業の流れがわかるようなレイアウトにする。
- ファイリングしやすくして復習に役立たせるために、ワークシートのサイズを統一する。（例：A4・A3等）

教師が生徒の持つ学びにくさを理解し、その解消に向けた工夫をすることにより、生徒は学習内容の理解を深め、学習に対して自信を持てるようになりました。

視覚・聴覚・運動覚的な手立ての工夫例

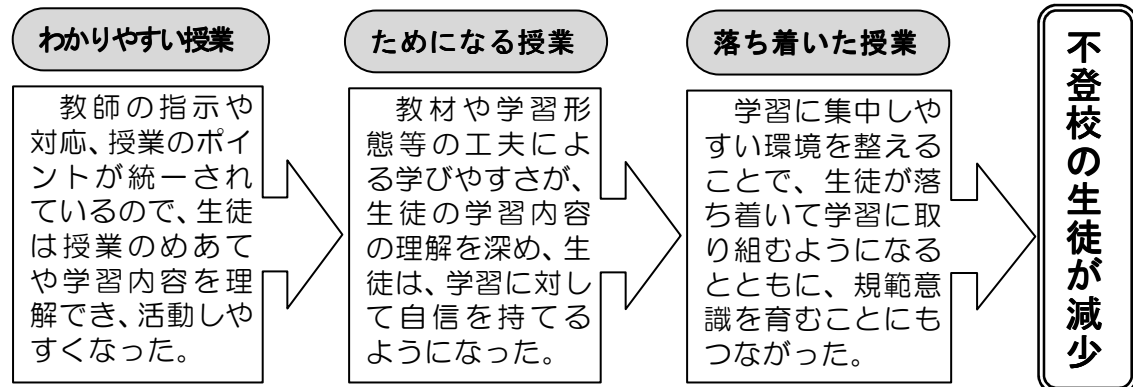
視点	項目	具体的な内容	ねらい
視覚	板書の工夫	チョークの色とノートの色を連動させ、覚える事項は「板書は黄色」「ノートは赤」で書く。	見る活動と覚える活動を連動させる。
	図の提示	あらかじめ紙に書いておいた図を黒板に掲示する。	板書している間、活動が中断することを防ぐ。興味を喚起する。
聴覚	話し方	説明や指示を短くする。	集中することが難しい者へ配慮し、指示を徹底する。複数の指示を同時に把握できない者の混乱を避け、指示を徹底する。
	発問	発言パターンに合わせ発問の仕方もパターン化し、定着させる。	どの方法で発言したら良いのかを判断しやすくする。
運動	直接体験	事物を触らせる。	重さや手触り・温度・音などを体感することにより、イメージをより深く捉えられるようにする。
	隊形の変更	活動ごとに机の向きを変えさせる。	場面が変わったことを体感できることにより、気持ちの切り替えを容易にする。

手立ての視点と具体的な内容の関連については、C中学校が独自に考えたものです。ここで注目したいことは、工夫するねらいが明確になっていることです。それぞれの工夫が、どの学びにくさを解消することにつながるのか、どのような効果が期待できるのかを授業者が意識することで、学びやすい授業づくりにつながっているといえるでしょう。

◇取組みの成果◇

- 不登校生徒が減少した。
平成15年度約8%→平成22年度5%→平成23年度2.7%
- 学校全体が落ち着いて諸活動に取り組めるようになった。

学びにくさを持つ生徒への支援が、そのまますべての生徒にとってのわかりやすさにつながりました。その結果、「わかりやすい授業」、「ためになる授業」、「落ち着いた授業」が展開され、不登校の生徒が減少しました。



現在は、不登校や問題行動の未然防止に向けて、小中連携の視点から、小学校からの早期理解・早期対応を協働して行うことを推進しています。

4 具体的な取組み

(4) 「学び直し」を軸としたカリキュラムで不登校対策！

神奈川県立G高等学校定時制課程

学校の規模

○生徒数：約200名、学級数：9学級

学校の課題

- 基礎学力が不十分な生徒への対応
- 小・中学校の時に不登校を経験した生徒への対応
- 学校に通うことに対して意味を見いだせずに、中途退学していく生徒への対応

神奈川県立G高等学校定時制課程（以下、G高校という。）では、基礎学力が不十分な生徒や過去に人間関係や学習面でつまずいた経験のある生徒、学校に通うことに対して意味を見いだせずに中途退学する生徒を抱えています。このような生徒に対して、学ぶ意味を見だし、将来に希望や展望を見だして欲しいという願いで、生徒の立場に立った学び直しに取り組んできました。

「学校教育目標・指導方針」には、「確かな学力の定着と目的意識をもった学ぶ態度の育成」と「生徒の学習状況に応じた小集団・習熟度別授業による得意科目の伸長と不得意科目の克服」が示されており、学ぶ態度の育成を重視していることがわかります。

このような考え方の下、教師は次のような願いを持って授業づくりに取り組んできました。

授業づくりに向けた教師の願い

- 生徒が学びたいと感じる授業をつくりたい。
- 生徒の登校意欲を促すために、自分の力が伸びたり楽しいと感じたりできるような、「出たら得をする」と感じる授業を取り入れたい。
- 安心して学習できる雰囲気づくりをしたい。
- 履修促進をし、卒業後に働くことができる生徒を育てたい。

G高校の生徒の中には、中学校の時に「学校へおいで」と声を掛けてもらえなかった生徒が多く、教師は、このような生徒に「講座が面白いからおいで」と積極的に声を掛けています。そして、「生徒に学校に来てほしい」「学校で学んで、力をつけてほしい」という願いを実現させるために、日々の授業において次のようなことに取り組んでいます。

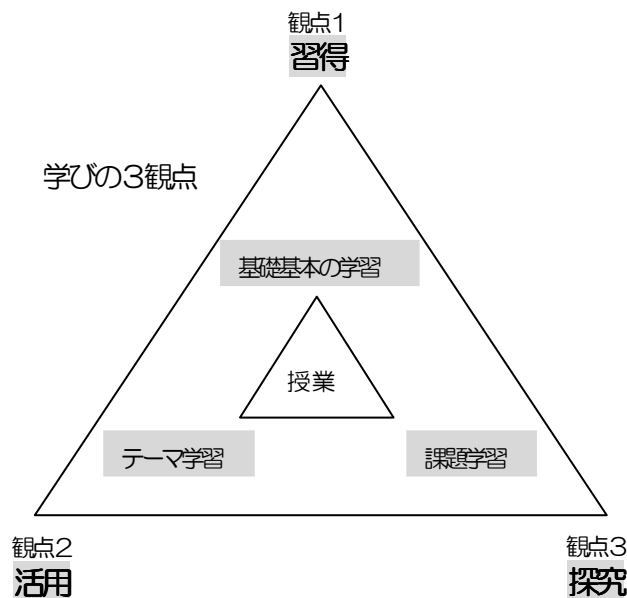
課題解決に向けた取組み

- 単位制を活用した新たなカリキュラム編成方針を定めている。
- 一人ひとりの能力に合わせて、授業編成を工夫したり習熟度別のクラス編成をしたりする。
- 中学校の学び直しを中心に、基礎基本の定着を図る。

G高校の教育課程の特徴は、新学習指導要領に基づき、新たな学びのキーコンセプトとして、習得・活用・探究の3観点で構成された「学びのトライアングル」をカリキュラム編成の方針として定めていることです。

学びのトライアングル

— 習得・活用・探究型の授業づくり —



第12図 学びのトライアングル

観点の一点目「習得」は、「中学校の学び直し」や、“じっくりゆっく”学ぶことができる「1年半履修」のシステムや習熟度別授業編成などによる「基礎基本の学習」です。二点目の「活用」は、大学・短大・専門学校の講師や社会人を交えた体験的な「実学講座」などにより実社会との接続を図るキャリア教育の性格を持つ「テーマ学習」です。(詳細は78ページ参照) 三点目の「探究」は、発展的内容を自主的・主体的に学んだり、通信制課程の科目を履修したりすることもできる「課題学習」です。

このカリキュラム編成は、不登校対策として行われたものではなく、平成20年度以降、単位制推進を軸とした教育課題の解決に向けた新たな学びの研究開発として、G高校が推進してきたものです。

しかし、小・中学校で不登校を経験した多くの生徒を抱えるG高校の現状と、生徒一人ひとりの個別対応を大切に行われている授業づくりの取組みを見ると、不登校の未然防止につながるヒントを得ることができます。

ここでは、出席したくなる雰囲気や安心して出席できる授業づくりに向けた教師の取組みと、授業について生徒にインタビューをした内容を紹介します。

◆実践内容の紹介◆

生徒一人ひとりの個別対応を大切にするために

G 高校では、個別対応を大切に考え、次のような点を教職員間で共通理解し、生徒と接しています。

教師が心掛けていること

- プラスの言葉で指導する。
- やさしく接し、わかりやすく教える。
- 失敗をとがめない。
- 授業に参加するといいいことがあると感じさせる。
- 個に合わせた対応をする。

体制づくりの工夫

- 可能な限り教員 2 人体制で個別指導をする。
- 職員室の近くの教室を別室対応の教室にして、職員がいつでも対応できるようにしている。
- すべての授業をオープン化し、いつでも教師や保護者等が教室に入れるようにしている。

また、生徒が授業に出席しやすい雰囲気をつくったり、生徒が安心して意欲的に学習に取り組むことができるようにしたりするために、次のような取組みを日常的に行っています。

授業に集中できずに騒いでしまう生徒への対応

- 教科担当以外の教員が別室に連れて行って、学習をサポートしたり、生徒の不安をじっくり聞いたりして、落ち着いた状態になってからクラスに戻すようにしている。

忘れ物への対応

- 忘れ物をした生徒のために、教科書や筆記用具を教師が準備しておく。「どうして忘れたの」と失敗を責めるのではなく、失敗を繰り返さないようにする支援をしている。

習熟度別プリントでの対応

- 集団で授業を受けることが難しい生徒には、別室で個別に学習指導(プリント学習等)している。また、学力の高い生徒に対しては、レベルの高いプリントも用意している。個々の学力に応えるために、習熟度別プリントを用意している。

使用する教科書について

- 最初から内容が易しい教科書では、生徒の学習意欲が下がるので、難しい教科書を使って、かみ砕きながら丁寧に教えるようにしている。

こうした取組みを通して、生徒一人ひとりの個別対応を大切にしながらも、最終的にはすべての生徒が教室に戻り、集団で学習することができるようにすることを目指しています。そして、「学校に来れば自分に合った学習が受けられる」、「学校に来れば何とかなる」という思いを生徒に抱かせることによって、履修促進の成果を上げています。

G高校の生徒へのインタビューからは、こうした教師のきめ細やかな対応によって、授業が「自分のためになること」を生徒が実感し、授業に対して前向きになってきたことがわかります。

高校の授業のよいところ

- わからないときはすぐに聞ける雰囲気がある。生徒を見ながら授業を進めてくれるので、先生の授業ではなく、生徒のための授業を考えてくれていると感じる。
- 中学の復習もしてくれるし、質問したいところを丁寧に教えてくれるので、すぐにわかる。授業の後も質問したいときにすぐ聞きに行けるので、個人個人に合った指導をしてくれていると思う。
- 苦手な科目も丁寧に教えてくれる。放課後も個人的に教えてくれたので、苦手意識が克服できた。

先生にしてもらったことでうれしかったこと

- 受験で悩んでいる大変な時も、卒業後の大切さを教えてくれたことがうれしかった。
- 「頑張れ」とか言われなかったことや、周りのことを気にしないでマイペースで良いと言われたことで、肩の力が抜けた。
- 嫌だと思ふことを無理やりやらせないことや、自分の話を受け流さず一生懸命聴いてくれたところがうれしかった。

G高校の教師へのインタビューの中に、「授業が楽しいと思うことで、一瞬にして登校できるようになるケースもある」という言葉がありました。不登校の未然防止には、やはり楽しい授業づくりが必要だと言えるでしょう。

◇取組みの成果◇

- 授業が「自分のためになること」を生徒が実感し、授業に対して前向きになった。
- 人前で話したり、将来のことを考えたりすることができるようになった。
- 学校出席率が増加し（3年間で約2倍）、退学者数が毎年減少した（3年間で約4分の1）。

この取組みは、「単位制による定時制普通科」の特色を生かしたのですが、「内容を精選した指導」、「生徒の学習状況に合わせた授業」、「じっくりゆっくりに進むカリキュラム」など、他校種でも授業づくりの参考となる視点があります。

5 | 自分の授業を見直してみよう

ここまで、具体的な実践事例を通して、不登校の未然防止につながる授業づくりについて述べてきました。より良い授業づくりのためには、PDCAサイクルに基づいて、実践を振り返り、次の授業に生かすことが大切です。ここでは、振り返りの手立てのひとつとして、本研究を通して作成した「授業見直しチェック表」を紹介します。

このシートでは、授業の計画から実践までを、具体的な教師の姿と児童・生徒の姿で振り返ることにより、「実践した授業が児童・生徒の願いや思いに答えられていたかどうか」を見直すものです。

シート1 授業見直しチェック表

<◎：十分達成できた ○：おおむね達成できた △：努力が必要>

視 点	チ ェ ッ ク 内 容	◎・○・△
教師の姿	1 身に付けさせたい力を明確に設定した。	
	2 学習課題は、児童・生徒の興味・関心を踏まえた。	
	3 教科の内容を深く理解して授業に臨んだ。	
	4 発問や指示の内容をわかりやすく児童・生徒に伝えた。	
	5 考える時間を保障した。	
	6 書く時間を保障した。	
	7 ペアワークやグループ活動を取り入れた。	
	8 教師よりも児童・生徒が話す時間を多くするようにした。	
児童・生徒の姿	1 わからないことをわからないと素直に言っていた。	
	2 教師や友達の話を集中して聞いていた。	
	3 聞き手に伝わるように話そうとしていた。	
	4 自分の思いや考えを自由に言っていた。	
	5 全員が授業に参加していた。	
	6 「わかった」、「できた」という声が聞けた。	
	7 「またやりたい」という声が聞けた。	
	8 学習のねらいが達成できた。	

※空欄は、各学級の実態や教師の考えに合わせて、チェック内容を書き込むためのものです。

不登校の未然防止につながる授業づくりへの意識を高めるためには、このようなシートを活用し、定期的に自分の授業を見直すことが大切です。